

GDPからGGWへ 豊かさの指標の人類史的転換

慶應義塾大学
教授 前野 隆司

ウェルビーイング（幸せ、健康、良い状態）という言葉が近年日本で頻繁に使われるようになった⁽¹⁾。私は、ウェルビーイングの潮流とは、単なる短期的な流行ではなく、人類史における農業革命・産業革命に匹敵する激変であると考えている。このため、産業革命以来の資本主義経済の主要な指標である GDP（Gross Domestic Product）から、ウェルビーイング革命後の指標が GGW（Gross Global Well-Being）へと転換することの必然性と可能性について論じる⁽¹⁾。

1. 人口増加と定常化のサイクル

米国の生態学者ディーヴェイが仮説的図式として表した、世界人口の超長期推移のグラフがある⁽²⁾。このグラフは、人類の登場からいままでの世界人口の増加傾向を示すもので、100 万年前から現在までが三つの段階に分かれており、いずれの段階も、増加を示した後にはフラットな定常期があるのが特徴である。

同様に、京都大学の広井良典教授が模式的に描いた「人類史における拡大・成長と定常化のサイクル」⁽³⁾と題する図がある。図 1 にこれを簡略化して示す。人類誕生から現在までの間に 3 度の上昇局面があり、増加の後には長い定常化が見られる。すなわち、20 万年前に誕生した人類は、最初、狩猟採集により生活する。食料が潤沢な間は人口が増えるが、食料に対して人が増えすぎると、増加は止まり定常化する（図 1 の定常化①）。そこで農耕が始まり、再び人口は増加に転ずる。しかし、やがて農業による人口増加に限界がやって来て定常化する（同定常化②）。次に産業化（工業化）が起こり産業革命を経て情報化・金融化へと続く。このため、再び人口が増える。しかし、その後に地球環境の限界が到来する。日本では、育児コストの高さと女性の再就職の難しさが壁となって、出産数の減少による少子化が進んだ結果、すでに定常化③に突入している。

【狩猟採集社会】 【農耕社会】 【産業化(工業化)社会】

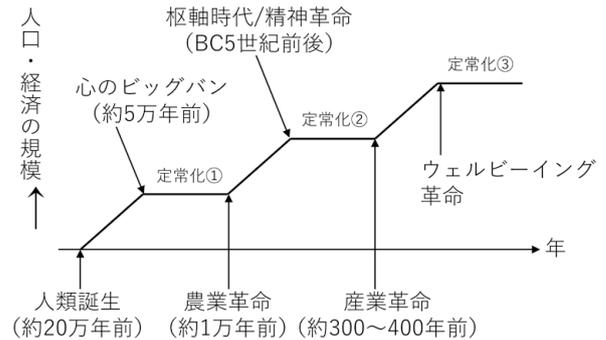


図 1 人類史におけるエポック
(前野、前野、2022 年⁽¹⁾を改変)

私たちは近代化後の約 300 年の間、増加傾向社会を生きてきた。日本には鎖国の江戸時代があったため、3 度目の上昇局面への突入は遅れたものの、明治維新以来 160 年間は成長社会の坂を上ってきた。しかし、日本は、バブル崩壊以降成長が止まり、失われた 30 年を過ごしてきた。GDP も世界 3 位に落ち、閉塞（へいそく）感のある時代だと考えることもできるだろう。しかし、人類史的に見ると、定常化社会は決して衰退社会ではない。1 度目の定常化社会は心のビッグバンといわれる約 5 万年前である。このころは、人類がアニミズム（自然崇拜）的な原始宗教を開始し、壁画などのアートを発明した時期である。つまり、人口増加中は狩猟採集のための新天地への展開に忙しく、いわゆる経済成長重視だった人たちも、成長が止まると時間が生まれ、心にゆとりもできて、壁画や構造物に取り組むようになり、人類の文化が栄えたということのようなのである。もちろん、成長が止まった局面では、食糧不足・栄養不足に苦しんだり、部族間で争ったりというネガティブな状況もあったであろう。だからこそ、人類は原始宗教とアートを発明し「いかに生きるべきか」を考えたのではないだろうか。

定常化社会で文化が栄えているときに温暖化が生じ、農耕が発明された。よって、人口は増加に転じる。また、余剰農作物を蓄積できるようになる。その結果、

貧富の差が生まれ、さらには支配者と奴隷といったような階層ができ、社会格差が拡大した。

農耕による経済成長も、やがて限界が来て止まる。2度目に定常化した紀元前5世紀前後は枢軸時代と呼ばれる。枢軸時代は、ギリシャではソクラテス、プラトン、アリストテレスの活躍した時代である。インドではブッダが生まれ、中国では孔子、老子、荘子、孟子などの諸子百家が輩出した時代であった。つまり、古代の文明都市に哲学、思想、あるいは宗教が生まれた時代である。紀元前5世紀前後は精神革命の時代なのである。西洋におけるキリスト教の誕生にはまだ500年ほど待たなければならぬが、そこにつながる古代ギリシャ文化やゾロアスター教などの宗教の始まりはここである。つまり、枢軸時代とは、1度目の踊り場と同様、定常期における閉塞感と安定感のはざまにさらされた人類が「いかに生きるべきか」を考えた結果として、思想・宗教や文化を生み出した時代といえるのではないだろうか。

ちなみに、日本では、定常化①の時代には縄文時代のアニミズムが栄えていたと考えられるが、それは後の神道に影響を及ぼしたと考えべきであろう。また、定常化②の時代には仏教、老荘思想、儒教などのインド・中国の思想が日本に影響を及ぼしたと考えられる。仏教伝来から江戸時代まで続いた神仏習合は、二つの定常化時代の影響が近代まで残っていたものと考えられることができる。

ある神道の宮司と話したところ、「神道の目的は、祖先と森羅万象に感謝し、世界の平和と幸せを祈ること」であるとおっしゃっていたのが印象的であった。

日本に伝わった大乘仏教の思想の一つは慈悲である。「世界中の生きとし生けるものが幸せでありますように」。神道と似ている。似ている理由は、先ほどの宮司によると「仏教が日本にやってきたころ、神道は仏教の影響を受けた。仏教も神道の影響を受けた。そして神仏習合した。だから似ていて当然なんです。」とのことである。明治維新の神仏分離以降に生きる現代人は神道と仏教は別物と考えがちであるが、定常化③の時代には、定常化①と②の融合した神仏習合とは何であったのかを改めて考えるべきではないかと思う。もっと言うと、定常化③にあって定常化①と②にないのはウェルビーイングの科学やIT、AIをはじめとする科学技術である。定常化③の思想は、思想とし

ての神道、仏教と科学技術が融合したものになるべきではないだろうか。

2. 「経済成長」から「心の成長」へのパラダイムシフト

定常時代に思想やアートが芽生えることについて述べてきた。本稿のタイトルにあるように、GDP 第一の時代(経済成長期・人口増加期)とは違って、定常期とは、GDW (Gross Domestic Well-being) の時代というべきではないだろうか。いや、国内だけに目を向けるのではなく、世界に目を向けて GGW (Gross Global Well-being) を考える時代というべきかもしれない。

そのような視点から日本の現状を見ると、どのように見えるだろうか。経済至上主義の観点から見ると、失われた30年ともいわれる時代は経済停滞期に見えるが、先に述べた二つの踊り場と同じことが起きつつあるのだとしたら、むしろ文化が花開く時代というべきではないだろうか。人類3度目の定常期を、豊かな成熟期にすべきではないだろうか。

日本は世界に先駆けて人口減少が起こっているが、見方を変えれば、定常化③への曲がり角を最初に曲がろうとしている国であるともいえる。日本は人類史的な曲がり角にトップランナーとしてすでに30年前から飛び込んでいると考えることもできるのである。

この曲がり角はもちろん日本にだけ用意されたものではない。少子化、食糧危機の波は、数十年後、数十年後には現在人口増加中のアフリカも含めて世界全てを飲み込む。世界人口は数十年から数十年後には減少に転じると考えられているのである。

これは人類史の必然である。興味深いことに、日本は、かつての世界の大きな潮流にいつも遅れて飛び込んできた。例えば世界の農耕開始は約1万年前だが、日本に農耕民族の弥生人が登場したのは約3,000年前だから7,000年遅れである。産業化も英国から遅れること約150年。このように、増加期に常に遅れて参入した日本が、今度は先に定常化に向かっているわけである。産業化で後れを取っていた鎖国時代に、日本は世界に誇る浮世絵やわびさびの茶道などを確立する文化的な時代を過ごしていた。つまり、日本は、豊かな定常時代の長い国なのである。そんな日本が、世界に

先駆けて3番目の定常化社会を迎えているのである。

人口増加時代と定常時代は、経済成長時代と心の成長時代といえる。人類は、経済成長から心の成長へというステップを2度繰り返した後に、3度目の経済成長を経て3度目の心の成長期へと移行しつつあるのである。心が成長する時代というのは、心の豊かさをめざすウェルビーイングの時代である。人間性を高める時代に向けて、日本はいまその一番手において、産みの苦しみを味わっているところと考えるべきではないだろうか。

こうした状況を踏まえて、国連の提唱する世界的な取り組みMDGs (Millennium Development Goals) やSDGs (Sustainable Development Goals) を見てみよう。現在進行中のSDGsは興味深い名称である。Sustainableは定常的な状態を表す。Developmentは開発という右肩上がりの概念である。よって、SDGsは維持と開発という相反する概念を組み合わせた目標ということができる。移行期のゴールである。

経済成長を続けていた2000年の世界で始まったMDGsでは、「格差をなくすために途上国も発展させよう」がゴールだった。それに続いて2015年から始まったSDGsでは、先進国も含めてサステナブルなデベロップメントをめざしている。こう考えると、来たるべき定常化時代におけるSDGsの次のゴールはAWG (A Well-being Goal) となるべきではないだろうか。複数のゴールの寄せ集めではなく、単数形であることにご注意いただきたい。「世界中の生きとし生けるものの幸せ」をめざすという唯一のゴールGGW (Gross Global Well-being) に向かうべき時代である。そろそろ人類の全体的なトレンドとして、発展途上国は何か何でも開発を先行させて先進国に追いつこうといった考え方から、人類が地球とともによりよく生きるには開発が全てではないとする考え方に変わっていくべきだろう。

これは、ルネサンス時に見られた、古代ギリシャ(かつての定常期の繁栄)に学ぼうという動きと似ている。これからの定常期には、前にも述べたように以前の定常期の思想である神道や仏教に学ぶべきなのである。もちろんただの懐古主義ではなく、AIなどのテクノロジーも駆使しながら、例えばクールジャパンのような新しいものと伝統工芸や伝統芸能、哲学・思想などが融合して新たな文化が生まれる時代の到来とも考え

られる。つまり、ウェルビーイング産業とも呼ぶべき産業が進展する時代である。

現在、健康産業と呼ばれる産業がある。医学の発展につれて予防医学としての健康学が発展し、健康意識も高まる中で、スポーツ、フィットネス、ヨガから食物、睡眠に至るまで、健康産業の分野は大きな広がりを見せている。同様にいま、「幸せ」という意味でのウェルビーイング、つまり心の幸せをめざした産業がすでに進展しはじめている。例えば、企業における研修やコーチング、オンライン・オフラインでの学びに関するもの、市民大学、YouTubeやInstagram、clubhouse、voicyなどの上で繰り返し広げられるコンテンツに至るまで、心をよりよい状態にしようという動きは始まっている。また、従来のモノによる経済的繁栄をめざす流れから、人や地球環境をよりよい状態にすることを重視したSDGsのようなトレンドへと、シフトが始まっている。今後は全ての産業がウェルビーイング産業になっていく時代と考えるべきではないだろうか。

ESG投資という流れもある。環境(Environment)、社会(Society)、統治(Governance)に配慮するという意味である。すなわち、投資をする際に、単なるものうけのための投資ではなく、環境によいことをしている会社に投資する、社会への貢献度の高い企業に投資する、といった活動である。こうした動きは今後さらに盛んになっていくと考えられる。

これらのトレンドは、近年、日本よりもヨーロッパの方が顕著な傾向がある。環境への配慮のない企業、児童虐待につながる労働現場を持つ企業、社会的不正義を疑われる企業などからはものを買わない、投資をしない、といった活動がヨーロッパでは盛んになりつつある。日本に対しても、火力発電でCO₂を出しすぎていると厳しい批判の目が向けられている。ウェルビーイングは、個人を対象にするのみならず、個人と社会と地球のよりよい状態を総合的に考えるものなのである。だから前述の通り、SDGsも包含するような概念だといえるのである。

心の幸せを求める世界でのトレンドの一つは、人の感性や創造性に訴えかけ、他者とのつながりを大切に、という流れである。経済成長から心の成長へ。では、心の成長とは何だろうか。過去から学べば、音楽や美術、武道、茶道、華道、神道、仏道といった文化、芸術、思想に寄り添ったものになるのではないだ

ろうか。伝統芸能や伝統工芸もここに含まれる。また、ここにAIなどのテクノロジーも介在すべきだし、クールジャパンのような現代的な文化・芸術も一翼を担うだろう。もちろん、それらを、金銭的欲求を満たすためだけに展開するのではなく、それ以上に環境への配慮を含めた社会性や公共性、人々の生活の文化的な質を高める方向、すなわちウェルビーイングが高まる方向に価値がシフトしていくのではないかと考えられる。

3. 「経済成長」から「心の成長」へのパラダイムシフトに関する研究と実践

閉塞状態にある資本主義に対して、経済思想史が専門の東京大学大学院齋藤幸平准教授などのように、この先は共産主義の進化型をめざすべきと批判的に捉える意見⁽⁴⁾がある一方、前述の京都大学の広井良典教授のように資本主義の範囲内でウェルビーイングを主体に考えていくべきと唱える意見⁽³⁾もあるなど、さまざまな考え方が出てきている。広井教授はその主張の中で「地球倫理」という言葉を用い、地球のことを真剣に考えるような時代になれば今後も資本主義の枠内で進展していけるとしている。世界に目を転じて、統計学や経済史的視点から経済的不平等を研究するフランスのトマ・ピケティ⁽⁵⁾や、「サピエンス全史」で石器時代から現代までの人類の進化をつづったイスラエルのユヴァル・ノア・ハラリ⁽⁶⁾など、大きく人類全体を俯瞰（ふかん）しようとする流れが出てきているのは、いま真に人類が転換期にさしかかっているからであると考えられる。

ここで興味深いのは、人類史的な大きな視点で述べる人も、Society 1.0～5.0⁽⁷⁾のように300年のスパンで見ると、さらに短くリーマンショック後のような視点を取る人も、同じくウェルビーイングの時代が来たことと捉えていることである。いずれも経済成長に偏りすぎ、個人主義、資本主義、自国中心主義に走りすぎた反省がいつそう顕著になった結果として、ルネサンスやロマン主義のころとも似て、過去の豊かさにも学ぶウェルビーイング時代が来ていることに関連すると考えられる。

いまの世情を見ていると、とてもそうは見えない、と

考える人もいるだろう。極端な自国中心主義のトランプ前大統領の出現や、ロシアの戦争、専横に走る中国、英国のEU離脱など、むしろ現代社会では自分主義、自国中心主義が拡大しつつあるようにも見える。これもやはり時代の転換点を表す現象なのだと思う。要するに、自国の利益を守るために保守的な従来型に戻そうとする勢力から、ピケティ氏、ハラリ氏、広井良典氏、齋藤幸平氏のように新しい時代が来るとする革新的な考え方で、つまり、保守から革新まで考え方が非常に多様化している時代、極論すれば混沌（こんとん）の時代なのである。先が読めないVUCA（Volatility・Uncertainty・Complexity・Ambiguity）の時代であるから、どうすればよいかかわからない。だから、いろいろな考え方が出てくるのは当然である。この中からどれかが淘汰（とうた）されていくことだろう。いずれにせよ、これまでの定常期はウェルビーイングの時代であったように、次の定常期もウェルビーイングの時代になるだろうと考えられる。同様に考える人が増えているから、ウェルビーイングが注目を浴びているといえるだろう。

政治、経済、哲学、教育、実業界など、各界で大きな議論が巻き起こっている。東京大学の公共政策の鈴木寛教授は時代の大きな転換を「卒近代」⁽⁸⁾と呼び、実業家の原丈人氏は公益資本主義⁽⁹⁾と呼ぶ。いずれも周りの世界と地球への配慮を重視する資本主義に転換すべきとの主張である。海外でも、ダボス会議のシュワブ会長⁽¹⁰⁾はグレート・リセット、すなわち産業革命以来の成長主義をリセットすべきと発言している。革命家を自認するジョアンナ・メイシー氏⁽¹¹⁾はグレート・ターニングと呼んで、農耕革命、産業革命以来の三つ目のターニングポイントであるという視点を披歴している。シューマッハ・カレッジの校長サティシュ・クマール氏はスモール・イズ・ビューティフルというE. F. シューマッハの言葉を用いて、大地とともに生きるべき時代の到来を強調している⁽¹²⁾。電子マネー「eumo（ユーモ）」を作った新井和宏氏は共感資本社会への転換をめざすべきだと述べている⁽¹³⁾。千葉大学院の小林正弥教授やハーバード大マイケル・サンデル教授は共同体主義への転換の必要性を強調する⁽¹⁴⁾。京都大教授の内田由紀子教授は集团的幸福という概念を打ち出している⁽¹⁵⁾。慶應義塾大医学部の宮田裕章教授も、同様にco-beingという概念を打ち出し、協

調的・調和的な生き方が大切であることをうたっている⁽¹⁶⁾。

それぞれ分野や視点が異なっているので違う考え方のように見えるかもしれないが、いずれも、経済成長重視の時代からウェルビーイングの時代への大きな転換について語っているものだといえよう。今後、さまざまな議論を通して、ウェルビーイングの時代への大転換は進展していくであろう。

4. ウェルビーイングについての各国の取り組み

日本国憲法の13条に、幸福追求権がうたわれている。「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」。これが基本的人権の幸福追求権である。

幸福度を下げる要因の一つは、孤独・孤立である。日本でも2021年に、世界で2番目となる孤独・孤立対策担当大臣が設置された。ウェルビーイング政策の一步といえるだろう。

英国では2010年に、当時のキャメロン首相が国家としてウェルビーイングに取り組むと宣言して、統計局がウェルビーイングを計測するようになった。つまり、GDPばかりを重視していた従来政策から、国民の幸福度(GDW)も数値にして見える化しようとの試みである。ちなみに英国では2018年に孤独・孤立担当大臣を置いている。

ニュージーランドでは、国民の幸せは国の義務と考え、2019年より、幸せをコンセプトに入れた予算「ウェルビーイング・バジェット」を取り入れている。国民の生活水準を向上させる取り組みには予算をつけるとしている。ウェルビーイング・バジェットは五つの基軸からなる。①メンタルヘルス支援、②子どもの幸せをサポート、③マオリと南太平洋諸国系民族の生活向上、④イノベティブな国家創生、⑤サステナブルな経済社会への移行である。政治の枠組みなので抽象度も高いが、広い意味でのウェルビーイングを考慮した政策を行うということである。

ブータンは、GNP (Gross National Product) の代わりにGNH (Gross National Happiness) をめざすと

宣言している国である。ブータンの多くの国民はチベット仏教の一種であるブータン仏教を信仰している。仏教とは、基本的に心の平静を求める宗教なので、ブータンがよりよい心の状態、つまりハピネスをめざすことは、仏教国として違和感はなかったのである。一般に、ブータンは世界一幸せな国と捉えられることがあるが、そうではなく、世界に先駆けてハピネスという概念を政治目標に取り入れた国ということなのである。

ブータン仏教では「世界の生きとし生けるものが幸せでありますように」と日々祈る。そうした利他性を含めて、仏教的な幸せ感の高い国だといえるだろう。

ウェルビーイングをキーワードとする新たな経済の概念を基に Well-being Economy Governments というユニオンも結成されている。加盟しているのは、スコットランド、ニュージーランド、アイスランド、ウェールズ、フィンランドで、国や地域としてウェルビーイング・エコノミーの理解を深め、推進することをめざしている。ウェルビーイング・エコノミーは、自然へのアクセスや社会参加、コミュニティのつながりや公平さといった、人間にとって必要とされるニーズを満たすことが大切、というコンセプトに基づく活動である。世界ではこのように、国として取り組むのみならず、国家間連合を形成する動きも出はじめている中で、日本を含むアジアはどちらかといえば出遅れている印象がある。

経済協力開発機構(OECD)においても、新たな教育のフレームワーク「教育2030」には全人類の繁栄や持続可能性、ウェルビーイングに価値を置いて、それらを重視した教育をすべきだと明記されている。つまり、個人と集団双方のウェルビーイングに資する教育をすべきということについて、教育分野においてウェルビーイングについての活発な議論が行われている。OECDではまた、所得、住宅、健康、教育、環境、安全など、11分野について加盟各国の状況を報告する Better Life Index 調査を定期的に行っている。その中の一つとして、「主観的幸福(Life Satisfaction)」がテーマとして取り上げられている。そこで測られた各国の幸福度も、雇用不安、寿命、成人の技能、健康状態の認識など、いくつかの指標に分けて数値化されて発表されている。つまり、ウェルビーイングの指標化の動きが活発化しているのである。

短期的視点で見ると、わが国はウェルビーイングの指標化や予算化が遅れた国であると見ることもできる。一方、人類史的視点から見ると、豊かな定常期の長い国であった。また、神道、仏教やそこから派生した美術・建築など、過去の定常期の思想を現代に受け継いできた国でもある。日本は昔、和の国と呼ばれていた。The land of peace and harmony である。そんな日本のこれからの役割は、世界が和の世界に移行することの先導ではないだろうか^{(17) (18)}。

5. おわりに

人類史の視点から、経済成長期と定常期の繰り返しについて述べた。そして、現代社会とは経済成長期から定常期(心の成長期またはウェルビーイングの時代)への大転換時代であると考えられることについて述べた。タイトルに示したように、GDP の時代から GGW の時代へのパラダイムシフトである。世界中の研究者・実践者の発言や各国の取り組み事例がパラダイムシフトを支持していることについても述べた。

全ての人が「いかに生きるべきか」を考え、全ての生きとし生けるものの幸せを願う世界の到来を心より願いつつ筆を置きたい。

参考文献

- (1) 前野隆司、前野マドカ、ウェルビーイング、日経文庫、2022
- (2) Cohen, Joel. E, How Many People can the Earth Support?, W. W. Norton & Company, 1995
- (3) 広井良典、人口減少社会のデザイン、東洋経済新報社、2019
- (4) 齋藤幸平、人新世の「資本論」、集英社、2020
- (5) トマ・ピケティ、21 世紀の資本、みすず書房、2014
- (6) ユヴァル・ノア・ハラリ、サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福、河出書房新社、2016
- (7) 内閣府ホームページ、Society 5.0 とは、https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/ (2023 年 9 月 9 日閲覧)
- (8) 鈴木寛、熟議のススメ、講談社、2013
- (9) 原文人、「公益」資本主義、文藝春秋、2017
- (10) クラウス・シュワブ、グレート・リセット ダボス会議で語られるアフターコロナの世界、日経ナショナルジオグラフィック、2020
- (11) ジョアンナ・メイシー、アクティブ・ホープ、春秋社、2015
- (12) サティシュ・クマール、エレガント・シンプル シティー 「簡素」に美しく生きる、NHK 出版、2021
- (13) 新井和宏、持続可能な資本主義、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2017
- (14) 小林正弥、サンデルの政治哲学 <正義>とは何か、平凡社、2013
- (15) 内田由紀子、これからの幸福について 文化的幸福観のすすめ、新曜社、2020
- (16) 宮田裕章、共鳴する未来、河出新書、2020
- (17) 前野隆司、幸せの日本論 日本人という謎を解く、角川新書、2015
- (18) 前野隆司、ディストピア禍の新・幸福論、プレジデント社、2022

執筆者紹介



前野 隆司 (まえの たかし)

1962 年山口生まれ。東京工業大学卒、東京工業大学修士課程修了。キャノン株式会社、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授などを経て現在慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授兼慶應義塾大学ウェルビーイングリサーチセンター長。博士(工学)。2024 年から武蔵野大学ウェルビーイング学部長兼務予定。専門は、ウェルビーイング、イノベーション、システムデザイン。